

## 探究を通じた高大接続の課題

～高大連携により、ともにAPに合う学生の育成を

旧課程の「総合的な学習の時間」は、社会課題について調べて発表して共有するという色合いが強かったのですが、新課程の「総合的な探究の時間」は、生徒自身のキャリアと社会課題とをからめて考えるものとされています。何をしたいのかを探究を通じて考えさせ、進路指導に使う高校も増えてきています。高校で探究が活発になれば、年内入試を希望する受験生がさらに増えるでしょう。しかし、すでに現段階でも、年内入試受験生の増加で、APを読み込み、生徒の長所を客観的に引き出す指導まで手が回らなくなっています。そもそも年内入試の受験指導は教員の経験頼みの面があり、個人ごとに差があります。加えて、生徒の志望理由書などの出願書類のアウトプットのレベルがまちまちで、その指導に時間を取られているといった問題もあるようです。

大学側はどうでしょうか。大学は、年内入試の受験者に「明確な志望動機」を求め、高校もそれを重視する一方で【図表9】、実際の選抜で大学が最も重視する項目は「面接・グループディスカッション」で、「志望理由」は、学校推薦型で4%、総合型で9%に過ぎないという調査結果があります【図表10】。「志望理由は大事だが、見極める方法は面接」であれば、大きな負担がかかる志望理由書は課さなくてもよいのではないかと感じてしまいます。

ベネッセ文教総研 所長  
**西島 一博**

にしじまかずひろ●(株)ベネッセコーポレーションで、小・中・高校対象の教材開発に携わる。2016年度より(株)ランズの代表取締役社長を務め、2021年度より現職。



このギャップを埋めるため、まず入試の面で考えられるのは、年内入試の評価基準の明確化です。桜美林大学の探究入試Spiralのように、評価基準をルーブリックとして公開することは、高校教員からの信頼につながるでしょう。また、APを高校生に理解しやすい形にすれば、年内入試の準備が容易になるだけでなく、生徒本人の目標とこれからの成長に向けた指標になるはずです。なお、共通テストの出題が探究的なものになっていっていますので、各大学の個別学力検査でも探究の力を測るようになれば、高校での探究学習をより一層促すことでしょうか。教育の面では、高校に教員や学生を派遣するだけでなく、高校生が大学に来るイベントを開催するのよいと思います。探究プログラムの提供は、自学の教育研究やAPを体感してもらう機会にもなります。

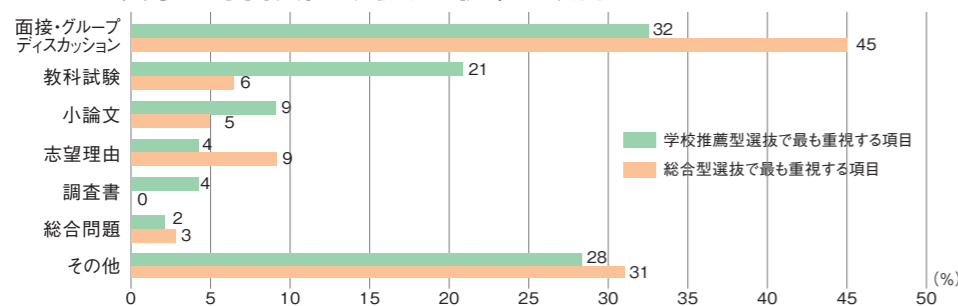
最近、地元の高校生対象の探究発表会を開く大学が増えてきています。生徒にとっては目標になり、他流試合で刺激を受けることができます。それが後輩にも受け継がれれば、文化としてその高校に探究学習が根付きます。もし、こうした発表会が開催されていないエリアであれば、実施してはいかがでしょうか。

【図表9】年内入試で求める力についての高校と大学のギャップ ※数値は調査の有効回収数(高校調査924校、大学調査494校)に対する割合。

	高校		大学		B-A	C-A
	A.推薦・総合の出願検討で重視している力	B.受験生に求める力(学校推薦型)	C.受験生に求める力(総合型)			
明確な志望動機(大学・学部・学科で学びたい理由)	74%	79%	89%	6%	15%	
卒業後の展望(社会に出た後にやりたいことやその理由)	48	43	55	-5	7	
基礎学力	33	62	28	29	-5	
コミュニケーション能力	30	53	63	22	33	
自らの興味・関心に応じて行動できる力	30	39	47	9	17	
何事にも前向きに取り組む姿勢	29	50	61	21	32	
思考力、判断力、表現力などの応用的な学力	20	54	55	34	35	
興味・関心のある分野についての専門的な知識	18	21	27	3	9	
社会の諸問題に対する関心や課題意識	17	28	33	11	17	
協調性	14	38	45	24	31	
各種大会での受賞歴、各種資格の取得状況、探究活動の実績	12	17	24	5	12	
各種大会や資格、探究活動などの目標を達成するためのプロセス	11	19	28	8	17	
リーダーシップ	9	20	28	12	20	

\*【2022年度新課程および教育活動全般に関する調査】ベネッセコーポレーション教育情報センター (全国の国公私立高等学校・中等教育学校の進路担当教員対象。n数=924。2022年3月実施)

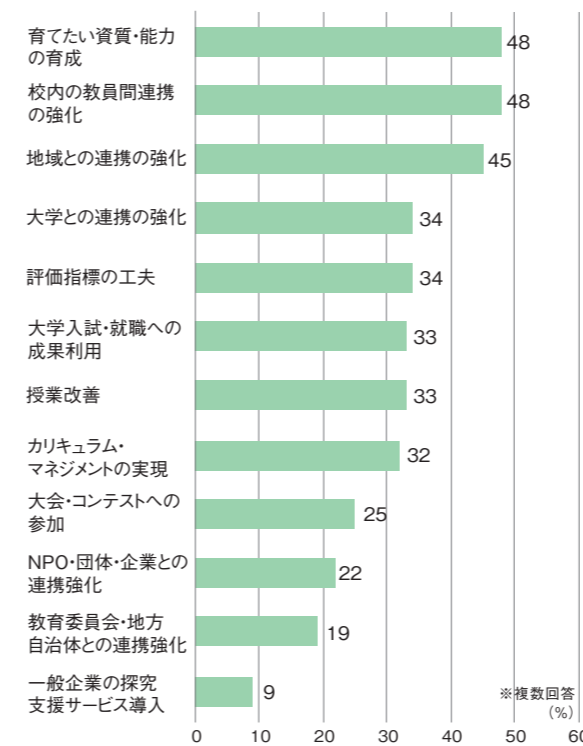
【図表10】大学が年内入試で最も重視する項目 ※数値は無回答を除く全回答数に対する割合。



\*【学校推薦型選抜、総合推薦型選抜に関するアンケート2021年度調査】ベネッセコーポレーション教育情報センター (国公私立大学の入試・広報・学務等担当者対象。n数=494。2021年12月～2022年2月末実施)

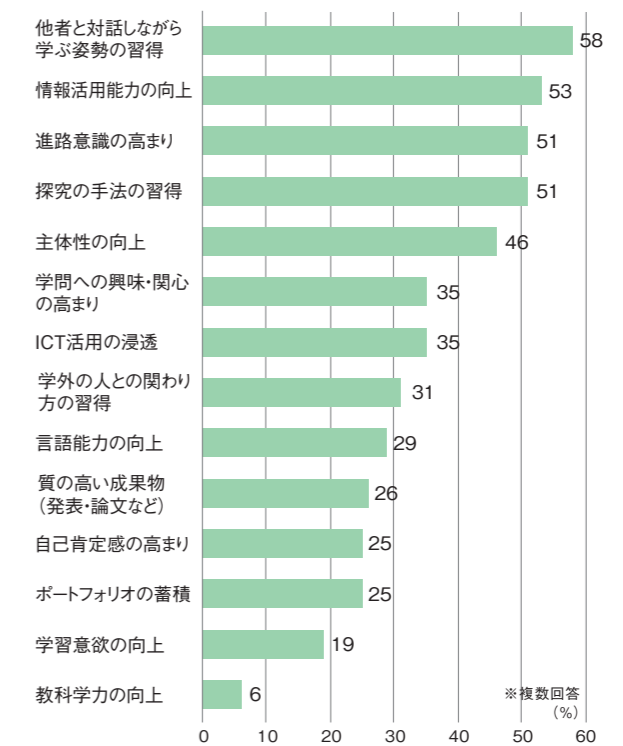
れる」という特徴が見られることが多いという結果が出ている【図表8】。こうした学生の存在は、大学全体の活性化につながる。一方、年内入試で求める力や重視する項目については、高校・大学間にギャップがある【図表9】。これをどう埋めるのか、今後、検討する必要があるだろう。

【図表7】今後力を入れたいこと



\*【図表6、7】「2022年度新課程および教育活動全般に関する調査」ベネッセコーポレーション教育情報センター (全国の国公私立高等学校、中等教育学校の進路担当教員対象。n数=924。2022年3月実施)

【図表6】探究の効果として実感していること



【図表8】年内入試で入学した生徒の特徴

	全体	国立	公立	私立
大学での学習に対する意欲が高い	65%	85%	80%	62%
大学の授業以外の活動(資格取得や地域貢献活動など)において積極的な学生が多い	58	75	70	57
退学率、休学率が低い	43	33	43	43
大学での学業成績が良い	40	50	56	38
大学の授業などでリーダーシップをとれる学生が多い	40	64	35	39
就職内定率が高い	31	30	18	32
就職で人気企業、倍率が高い企業への合格率が高い	19	20	7	20

\*数値は無回答を除く全回答数に対する「とても当てはまる」「やや当てはまる」の回答割合の和。  
\*【学校推薦型選抜、総合推薦型選抜に関するアンケート2021年度調査】ベネッセコーポレーション教育情報センター (国公私立大学の入試・広報・学務等担当者対象。n数=494。2021年12月～2022年2月末実施)

# 探究学習の年内入試への活用

探究の経験や成果を大学入試で評価する意義

高大接続事業として探究学習支援に取り組む際、考慮すべきは、自学の教育との親和性と、接続としての入試だろう。それには高校教員が実感する探究学習の効果実感【図表6】や、今後力を入れたこと【図表7】が参考になるだろう。本誌で以前、取材した東京都立松が谷高校では、「従来、偏差値と知名度だけで進学先を決めがちだったが、探究学習をきっかけにやりたいことを見つけ、それができる大学に、探究の成果を活用し年内入試で進学する生徒が増えた」という。彼らは後輩に「探究の中で本当にやりたいことが見えてくる」「理系は実験で失敗することもよい経験。それが大学で学びたいことにつながる」「他校生徒や大学教授と交流できる大学イベントへ参加しよう」等の助言をしており、将来につながる学びとして探究学習に取り組む。今後、大学は探究の経験やそれを通じた生徒の成長を適切に評価できるような入試の準備が求められる。探究を評価しやすい年内入試入学者は、「学習に対する意欲が高く」「授業以外の活動において積極的」「リーダーシップをと